

書翰と報告

愛甲次郎

(一)

窗外に秋雨に濡れて重たげなる櫛の葉を眺めつつ往にし日々を偲び居り候。

内藤兄には相變はず忙しき毎日と承り體調を損はれざるやう唯々お祈りする許りに候。

小生儀取り立てて支障は御座らねど寄る年波は殊の外厳しく、家の中にも何時轉びて骨折などせぬかと惧るる次第に候。テレビを見る合間に獨り住ひの食事の支度、後片付けの外爲すことも無き怠惰なる生活に變化を求めて、貴兄に一筆啓上せむとパソコンに向ひし次第に候。

家内八箇月に亙る長期の入院生活より解放せられたる間もなく再び病院に舞ひ戻り候。コロナのため面會謝絶のことなれば精神的打撃も少なからず、唯ひたすら待つの一事に候。ここ數年佛道修行に遠ざかりて瞑想すら爲さざる體たらくなりしも最近思ひ直し先づは法華經の讀經を再開致し候。貴兄もご先祖佛師の由なれば佛教に關心を持たるる事も之あるかと存じ候。さらば佛道につき思ひ至ることあらば再び雁信之あるべく候。

内藤學兄

愛甲

(二)

六月二日鎌倉文語教室の府川氏より電話あり。氏によれば、舊知の自民党代議士坂井學氏より怪異なる體驗談を聞き及びし處、余なればこれを一笑に付することもなかるべしと思ひ、電話にて報告する由と。

坂井氏硫黄島慰靈のことを思ひ立ちて一日同島を訪れぬ。夜半唯ならざる氣配を感じ、傍らを見るにカーキ色の軍服に身を固めたる姿あり。偶々手元にありし菓子折りを手渡したる所、手を握り返し(國を)任すと言ひて消えぬと言ふ。

余惟ふに硫黄島は數萬の英靈眠り、他に住む人も無き日常を超えたる空間なり。直ちに信じ難き事なりともその知見は然るべき敬意を以て聽すべし。余常々數十萬の英靈我國を見守り給ふを感ず。

多くの日本國民そのことに思ひ至らざるは忘恩と言はざるべけんや。

二千五年五月二十七日日本海海戦百周年記念日にあたり余明治神宮、東郷神社、靖國神社に詣づ。僅かなる外國人觀光客らしき姿のほか人影を見ることなし。他の國ならば祝賀行事のため立錐の余地も無かるべし。當時の總理はこの日モスクワにありてロシアの對獨勝利記念の行事に参加したるなり。いつの日かかかる國を擧げての痴呆ぶりより解放せらるべけんや。

(令和二年九月二十九日受附)